第6回学生社会意識調査

——調査結果とその分析——

The Sixth Research of Student's Social Consciousness

岩本　勲　　瀬島順一郎　　山田全紀
Isao Iwamoto　　Junichiro Sejima　　Masanori Yamada

はじめに

80年代の学生の社会意識を探るとして、ちょうど1980年に出発したこの調査も80年代最後の年に第6回目を迎えた。この調査を始めた動機は、「保守化した」あるいは「本を読まなくなった」と言われる現代学生像をその社会意識をとおして浮き彫りにしてみようということであった。もとより、学生の社会意識は学生だけの固有の意識ではなく、時代の意識の最も敏感な、しかしある程度はデフォルメされた反映である。だから、学生の社会意識を見ることは、同時に社会全体の意識の特徴をある意味では誇張された形で知ることにもなる。さらに、学生が次代の担い手であるとすれば、現代学生の社会意識は将来の社会の動向を占うひとつの指標となりうるかもしれない。

それにしても80年代は内外ともに激動の年代であった。80年代当初は朧げながらも、日本が戦後史の転換期にさしかかったとの思いはあったものの、いま振り返ってみると変化は、単に日本にとどまらず、すべての人の予想をはるかに越える全世界的規模の激震そのものであった。これを学生たちはどのように受けとめたのであろうか。80年代を通観して分析することは極めて興味深いことであるが、これは別稿に譲らざるをえない。この間、蓄積した資料は膨大になり、出来事は複雑を極め、簡単にはことはすまないからである。本稿ではまずは89年調査に限って分析を行うことにしたい。

(1)　調査目的

1980年代における学生（短大生をふくむ）の社会意識の経年的変化の分析。

(2)　調査項目

政治意識と余暇の過ごし方および読書傾向。質問事項については後掲調査用紙参照。

(3)　調査対象

大阪産業大学（325名、29.2%。以下のカッコ内は人数と%を示す）、大阪大学（238、21.4）、大阪経済大学（78、7.0）、三重大学（286、25.7）、帝塚山短期大学の（111、10.0）、三重短期大学（76、6.8）、合計1114名、うち男 725名、女 386名、不明3名。

平成2年5月28日原稿受理

大阪産業大学　教養部

(4) 調査方法

質問用紙による集団調査。

(5) 調査期間

1989年6月24日－7月8日

分析については、Ⅰ部を岩本、Ⅱ部のうち余暇の過ごし方を山田、読書傾向を瀬島が担当した。

調査にあたっては、今回も帝塚山短期大学の森一貫教授にご協力を賜った。集計作業では三重短期大学の心理学ゼミナールの皆さんにお手伝いいただいた。データ作成は三重電子計算センターにお願いした。紙面を借りて厚くお礼申し上げたい。またこの調査は第3回以来、大阪産業大学産業研究所の特別研究費の援助をいただいている。重ねてお礼申し上げたい。

第Ⅰ部　政治意識

本調査を行った1989年は、戦争直後の一時期を除く戦後日本政治史においても極めて稀有な年であった。保守一党支配が危急存亡の淵に立たされた、といっても過言ではない状況が生じたからである。国会では前年度以来、消費税問題をめぐって久々に与野党が鋭く対立し、年末には強行採決によって同法がようやく成立するというありさまであった。同時に、リクルート疑惑が発覚し、これに関連した宮沢蔵相、長谷川法相が辞任に追い込まれ、翌年3月にはNTT会長、労働・文部の元両次官が逮捕されるという前代未聞の事件に発展した。さらに同事件関連で窮地に立たされた竹下首相は退陣を余儀なくされた。くわえて宇野後継内閣は、女性スキャンダルで立ち往生するなど、お粗末の一言に尽きた。一方、これまで自民党票の金城湯池であった農村部では、農産物輸入自由化や減反政策で不満が膨れあがり、各種の地方選挙や参議院補欠選挙で自民党は連続して敗北をなめさされていた。7月参議院選挙での自民党の大敗は、このような一連の過程の総決算であった。

国際政治でもこの年、戦後の国際政治史を画する大きな変化に見舞われた。前年末のゴルバチョフ議長の50万人軍備削減に始まり、翌90年から欧州通常戦力交渉CFEの開始、中ソ和解、ブッシュ大統領の対ソ封じ込め政策の終了宣言など矢継ぎ早に東西デタントの過程が加速化し、その頂点は年末の、戦後の冷戦の終結を確認した米ソ首脳マルタ会談であった。同時に、天安門事件を皮きりに、社会主義の瓦解の危機にかかわる激動がソ連・東欧を襲った。

さて、このような内外の激動は、学生たちの意識にどのように反映したのか。もちろん調査時点では、参議院選挙の結果も出ていないし、国際問題では、マルタ会談以前であり、社会主義諸国の危機については、天安門事件、ポーランドの一党独裁の終了、ソ連民族問題の顕在化などまだ端緒段階であった。これらの諸点はさしひくとしても、明らかに学生たちはこの大激動を肌で感じ取っていた。

(1) 政治的満足度

政治的満足度（「非常に満足」0.9%、「やや満足」3.4%、合計4.3%）は、前回調査の半分以下となり、本調査を始めて以来の最低記録となった。「どちらともいえない」も同様で16.6%、反対に政治的不満足度（「非常に不満」38.4%、「やや不満」40.7%、合計79.1%）

(1) 政治的満足感

表Ⅰ－1　政治的満足度

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
政治的満足	4.3	10.3	14.2	9.1	8.3	5.1	12.0	13.7	10.0	10.6	2.8	7.4	15.1	6.7	6.3
どちらともいえない	16.6	34.6	38.6	31.0	32.3	15.4	29.3	35.0	28.2	26.2	18.9	44.0	45.7	37.3	38.0
政治的不満足	79.1	54.9	47.2	59.9	59.2	79.5	58.7	51.1	61.7	63.1	78.2	48.6	39.3	55.5	55.4

(80年調査は、サンプルが少なく、経年比較の資料としては不充分なので、81年調査以降のデータを使用した。以下、第Ⅰ部では同じ。)

は、前回調査より25ポイントも急上昇し、これも同じく新記録となった。とりわけ「非常に不満」の層の上昇が著しく、前回調査より25ポイント伸びている。このように見るかぎり、当時、政治的不満足度は相当高まっており、参議院選挙での自民党敗北の予兆はここでもかなりの程度はっきりと現れていた、といってもさしつかえあるまい。

男女別では、政治的満足度は、男子5.1%にたいして女子2.8%で、男子は女子の約２倍。「どちらともいえない」層は女子が男子を3.5%ポイント上回っているが、これまで女子のこの層が例年40%前後を占めていたことに比較すれば、女子の政治的自覚度は高まったともいえよう。

大学別では、政治的満足度の高いのは、大阪大学8.0%、次は大阪産業大学4.6%。一方、政治的不満足度の高いのは三重大学81.1%、次は大阪大学80.3%であるが、この項目では各大学の数値が幾分似かよっており、大学差は明瞭にはでていない。

(2) 政治に満足しない理由

表Ⅰ－2　政治的不満原因の上位３位

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
政党や政治家は党略・私利のみを追求する	67.0	52.6	51.4	54.2	48.8	67.3	52.6	53.8	53.2	52.7	66.9	52.5	46.5	56.6	45.3
汚職や選挙違反など不明朗なことが多い	44.7	25.9	30.9	32.0	41.8	42.4	26.4	29.8	28.9	36.5	48.8	25.0	33.4	39.0	46.3
平和と民主主義を守る努力が払われていない	9.5	20.0	22.7	27.5	21.1	9.4	19.5	21.4	26.0	23.6	9.6	20.7	25.1	30.9	18.7

(注) 回答は２つ選択

(89年調査では、３位は「生活が楽にならない」24.4%で、「平和と民主主義を守る努力から払われていない」9.5%で第８位となっている)

政治的不満原因のトップは「政党や政治家は党利・党略のみを追求する」67.0%、次は「汚職や選挙違反など不明朗なことが多い」44.7%で、この２つの原因が突出して高い。いずれも本調査始まって以来の数値で、とくに「汚職・選挙違反」は、前回調査より約20ポイントも上昇している。ここには、リクルート事件の影響がくっきりと現れている。

3位は「生活が楽にならない」23.1%、以下「政党の活動がみにくい」12.8%、「社会福祉政策が不十分」12.4%、「自然環境が保護されていない」11.7%、「文教対策が不十分」11.5%、「平和と民主主義が守られていない」9.5%の順になっている。「生活が楽にならない」が20%以上で3位に浮上し、その他の項目がいずれも10%前後になるという大きな格差が生じたことは例年にないことであるし、そのうちでも「平和と民主主義」が最下位に転落したことは注目に値する。「平和と民主主義」の問題は、いまや学生の意識のうちでは最小部分の位置しか占めていないことが示されており、このことは、極東のデタントは未だ始まっていないにもかかわらず、世界的な緊張緩和の大きなうねりの中で、学生の平和にたいする危機感が大幅に後退していることを意味していると考えられる。

男女別では、ほとんど差異はないが、「汚職や選挙違反」と「社会福祉政策」で女子が男子を若干上回り、「生活が楽にならない」で男子が女子を少し上回っている程度である。

大学では、いくつかのばらつきがみられる。「生活が楽にならない」で、大阪産業大学33.2%と突出して高い数値を示し、次いで大阪経済大学26.3%、これに帝塚山短期大学24.21%がつづき、最下位が大阪大学14.6%となり、いずれも私学の学生が経済生活に敏感なことを示している。この傾向は、調査ごとに共通のものである。「平和と民主主義」では、三重大学14.7%でトップであるが、これも毎回共通した傾向である。「自然環境」で帝塚山短期大学20.4%という高い数値になっているが、例年にないことでこの原因はよく分からない。

(3) 政治的関心度

表Ⅰ－3　政治的関心度

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
政治的関心がある	63.4	60.6	52.9	44.5	55.7	64.5	62.9	56.9	45.7	64.6	61.7	56.0	45.2	41.8	42.0
政治的関心がない	35.7	38.4	46.1	40.9	40.5	34.4	36.0	42.2	40.6	33.4	37.9	42.9	53.7	41.8	51.7
無　効	0.8	1.0	0.9	14.6	3.8	1.0	1.0	0.8	13.8	2.1	0.5	1.1	1.1	16.4	6.5

政治的関心度（「非常に関心をもっている」11.9%、「多少関心をもっている」51.5%、合計63.4%）は、過去最高を記録し、とくに「非常に関心をもっている」層が前回よりも4ポイント近く上昇している。このことは、最近の学生が政治的関心を失っているとよく言われているにもかかわらず、それは学生の責任というよりむしろ面白くもおかしくもない政治の側の責任であることを、あらためてはっきりと示した。つまり、参議院選挙を直前にして与野党逆転の大きな可能性が生まれ政治に動きが出ていた場合には、やはり学生たちは大きな政治的関心を示すということである。

男女別では、相変わらず男子が女子を上回っているが、今回の特徴は、女子の政治的関心度が急上昇し、男女の差異が非常に縮まり、その差は前回6.9ポイントだったのが、今回2.8ポイントにまで迫ったことである。女子の政治的関心度の高まりは、80年代の趨勢的傾向ともなっており、1981年度調査と比較すれば、実に20ポイントちかくの上昇となっている。

大学別では、トップは大阪大学81.5%、最低が大阪産業大学53.5%である。

(4) 政治に関心をもつ理由

表Ⅰ－4　政治に関心をもつ理由の上位3位

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
自分の生活に関係する	54.5	48.8	43.0	45.2	43.2	51.5	46.1	39.3	43.8	35.5	60.5	54.1	52.2	49.1	61.6
平和と民主主義を守るため	10.3	17.9	23.0	24.1	25.0	11.8	18.3	23.1	24.9	29.0	7.9	16.8	22.6	21.4	15.4
政治が面白いから	22.8	21.8	18.5	18.8	22.2	25.6	22.9	20.4	20.6	22.6	16.8	19.9	13.8	14.3	23.1

政治に関心をもつ理由の第一は「自分の生活に関係する」54.5%、第2位が「政治家の動きが面白い」22.8%、第3位が「平和と民主主義をまもるため」10.3%となっている。85年までは、第2位が「平和と民主主義」で第3位が「政治が面白い」であったが、87年以来、2位と3位が入れ代わり今回にいたっている。しかも、「平和と民主主義」は年を経るごとに低下し、今回と81年の25.0%とを比較すれば約15ポイントも下がっている。このことは、政治的不満理由のなかで「平和と民主主義」の問題の比重が著しく低下していることと照応している。

男女別ではかなり違った傾向を示している。女子が「自分の生活に関係」で男子を9ポイント上回り、一方「平和と民主主義」で男子を約4ポイント、「政治が面白い」で約9ポイント下回っている。

大学別では、「自分の生活に関係」で大阪産業大学58.6%、「政治が面白い」で大阪大学28.9%、「平和と民主主義」で三重大学14.4%がそれぞれの項目の第1位を占めた。

(5) 政治に関心をもたない理由

表Ⅰ－5　政治的無関心原因の上位3位

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
政治の問題はむつかしい	24.4	35.4	33.3	24.3	34.4	16.0	25.8	25.5	20.8	18.8	38.4	49.3	46.0	32.1	50.0
個人の意見は政治に何の影響も与えない	42.5	27.7	29.7	32.6	31.3	48.8	32.4	34.6	31.2	37.5	31.5	20.7	22.2	35.7	25.0
自分の生活に関係ない	11.8	14.6	12.1	16.3	9.4	13.2	16.0	11.7	16.0	12.5	9.6	12.7	12.7	17.0	6.3

政治的無関心の理由は、「個人の意見は政治に何の影響も与えない」42.5%、「政治の問題はむつかしくてよくわからない」24.4%、「自分の生活に関係ない」11.8%の順になっているが、今回初めて1位と2位が逆転した。学生たちの政治的関心が高まってきたことと、政治的無関心の理由で「個人の意見の無力」が多数を占めたことは好一対をなしている。つまり、この政治的無関心理由は、政治的無関心といっても、まったく文字通り政治に関心がないのではなく、むしろ逆に政治的関心があったからこそ政治に失望している近代型政治的無関心を示すものである。したがって、いわば当然のことながら、「政治はむつかしい」という文字通りの伝統型政治的無関心は低下し、前回よりも10ポイント以上も下がっている。

この項目では、従来どおり男女別で大きな違いをみせている。男子では「個人の意見の無力」が1位で48.8%と女子を17ポイントほど上回り、一方、女子では「政治がむつかしい」が38.4%で第1位を占めている。しかし、前回と比較すればこの数値は10ポイント以上さがっている。

大学別では、「個人の意見は無力」で大阪大学56.1%、「政治はむつかしい」で三重短期大学37.1%、「自分の生活に関係ない」で大阪大学19.5%となり、それぞれの項目で第1位となっている。

(6) 支持政党率

表Ⅰ－6　支持政党率

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
支持政党あり	16.4	15.7	17.4	19.0	18.3	18.5	19.1	19.1	20.9	22.0	12.4	9.7	13.9	14.6	15.0
支持政党なし	74.3	75.9	77.0	78.5	78.4	73.4	72.9	75.8	76.1	75.6	76.2	81.1	79.5	84.0	80.7

「支持政党あり」は16.4%で例年とあまり大差はない。政治的関心と政治的不満が高まっているにもかかわらず、なおかつ支持政党率が低いということは、とりもなおさず多数の学生をひきつけるにたる政党が存在しないということである。これもまた、先の政治的無関心の理由で「個人の意見の無力」が第1位になったこととも照応しているといえよう。

男女別では、「支持政党あり」で男子が女子を6ポイント弱上回っている。

大学別では、「支持政党あり」の第1位は大阪産業大学29.2%である。

(7) 特定政党支持率

表Ⅰ－7　特定政党支持率

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
自民党	29.0	47.4	64.1	44.0	52.6	29.9	48.7	61.5	41.1	44.0	27.1	44.1	71.4	53.8	64.4
社会党	33.3	24.0	9.8	11.3	16.2	30.6	23.5	11.1	10.9	21.0	41.7	26.5	6.1	12.8	9.6
公明党	7.7	8.4	9.2	7.7	8.1	6.0	7.6	8.9	8.5	8.0	12.5	11.8	10.2	5.1	8.2
共産党	17.5	13.0	7.1	16.1	13.3	17.9	10.9	8.9	17.1	14.0	16.7	17.6	2.0	12.8	12.3
民社党	1.1	3.9	2.7	5.4	4.0	1.5	5.6	3.7	6.2	5.0	0	0	0	2.6	2.7

支持政党ありと答えた学生のうち、今回初めて社会党支持率がトップを占め33.3%、一方、自民党支持率は29.0%で大幅に落ちた。共産党支持率もかなり伸び17.5%、逆に中道2党の支持率はいずれも低下し、公明党支持率7.7%、民社党支持率1.1%となった。共産党が伸びた以外は、ほぼ国民世論の動向と一致している。共産党の伸長は、やはり学生特有の傾向を示すものといえよう。70年代以降、学生の保守化傾向が指摘され今日では何の違和感もなくそれが受け入れられてきたが、この保守化傾向もやはり社会全体の意識の反映にすぎず、社会全体の意識の変化とともに学生の意識も変化することがあらためて証明されたともいえる。

男女別では、女子の社会党支持率が41.7%で自民党支持率を15ポイント近く上回り、しかも男子の社会党支持率を10ポイント以上も上回っていることが、ひときわ目をひく。いわゆる「おたかさん現象」というべきか。その他、女子では、公明党支持率が男子のそれより高く、民社党支持率は3回連続でゼロとなった。一方、男子では、社会党支持率が自民党支持率を少し上回ったがその差は1ポイント未満であり、実質的には両者は等しいと見てさしつかえない。

大学別では、社会党支持率のトップが三重短期大学54.5%、次が帝塚山短期大学46.7%、同様に自民党支持率は大阪大学31.7%、次が三重大学31.3%、共産党支持率は、帝塚山短期大学26.7%、三重大学21.9%、となっている。ただし、支持政党ありと答えた学生の数が全学生の16.4%にとどまり、したがって大学別政党支持率といっても、このような極めて小数のなかでの割合に過ぎないことを留意しておかねばならない。

(8) 特定政党を支持しない理由

表Ⅰ－8　特定政党を支持しない理由

(%)

	政党そのものが無意味	政策に大差がない	自分の意見を代表しない	派閥争い等に終始	清潔な党がない	主張が分からない	その他
全　体	4.3	13.0	7.4	25.1	12.6	26.8	8.7
男	5.3	14.1	8.5	26.9	12.0	23.1	8.3
女	2.7	11.2	5.4	21.8	13.3	33.9	2.4

(調査年度毎に回答の選択肢が、少し異なるので経年比較はできなかった)

特定政党を支持しない理由のトップは、「主張が分からない」26.8%である。これだけマスメディアが発達しているにもかかわらず、このような結果がでたことの原因は、もちろん学生の側に政党の主張や政策に耳を傾けようとする姿勢がないことにもあるが、政党の側にも旗幟鮮明さに欠けるところもあるのではあるまいか。第2位が「派閥争い等に終始している」25.1%で、この理由が高位にくることはほぼ毎回の調査で変わりはない。

男女別では、男子のトップが「派閥争いに終始している」26.9%であるが、これにたいして女子のトップが「主張が分からない」33.9%で、第2位の「派閥争いに終始している」21.8%を12ポイント以上も上回っている。このことは、女子の政治的無関心理由のトップが「政治の問題はむつかしい」であることと照応している。

大学別では、「主張が分からない」のトップが帝塚山短期大学38.0%、次が三重短期大学32.8%、同様に、「派閥争いに終始している」で、大阪大学36.4%、三重短期大学25.9%となっている。

(9) 新聞を読む割合

政治的関心度が上昇しているにもかかわらず、「新聞を毎日読む」(「必ず読む」35.6%、「大体読む」35.8%、合計71.4%) はやや低下気味で、とくに「必ず読む」という層が前回

表Ⅰ－9　新聞を読む割合

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
新聞を毎日読む	71.4	75.1	77.0	72.8	75.5	71.6	75.3	78.5	73.4	75.2	71.0	74.5	73.6	71.6	75.7
新聞を毎日読まない	25.6	22.8	21.5	24.6	22.5	25.5	22.4	20.5	24.2	23.3	26.9	23.4	23.6	25.7	21.7

よりも5ポイント低下している。現代学生の政治的情報源が、新聞からテレビのワイドニュースに移行しつつあることを示しているのだろうか。

男女別では、毎回の調査に共通して、ほとんど差異はない。

大学別では、「必ず読む」のトップが大阪大学51.3%であるが、「新聞を毎日読む」では、大学間にあまり差異はない。

(10)　興味をもって読む紙面

表Ⅰ－10　一番興味をもって読む紙面の上位4位

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
スポーツ	28.3	35.3	33.1	36.1	32.0	36.6	44.3	40.4	44.2	45.6	12.8	19.5	17.4	17.2	19.2
社会	33.9	26.8	30.8	25.9	28.5	28.3	20.2	27.6	21.2	19.6	44.5	39.1	37.5	36.5	36.0
文化・科学	10.4	14.7	12.9	12.4	11.5	10.4	15.7	14.1	11.7	12.6	10.6	12.9	10.4	14.1	10.0
政治・経済	15.7	9.5	9.4	10.5	10.1	18.1	11.7	11.2	12.8	14.6	10.9	5.4	5.8	5.2	5.7

(87年調査の場合、女子の「家庭・婦人」面の率は8.4%で「政治・経済」面を上回っている)

今回の調査の特徴は、「スポーツ」の比重が低下して第2位に下がり、「社会」との1、2位逆転を起こしていること、「政治・経済」が従来の第4位から第3位に浮上してきたことである。これも、政治的関心度の高まりと相関関係にあるといえる。

男女別では、男子では「スポーツ」が第1位で「社会」が第2位であるのに対して、女子ではこの順序が逆転しているが、これは毎回のとおりである。注目してよいことは、女子の「政治・経済」が10.9%で、これまでの約2倍の数値を示していることである。これも、(3)の政治的関心度の項において女子の政治的関心度が急上昇していることと密接な関係があろう。

大学別では、それぞれのトップが、「社会」で三重短期大学49.2%、「スポーツ」で大阪産業大学43.6%、「政治・経済」で大阪大学34.4%、「文化・科学」で帝塚山短期大学18.1%となっている。

(11)　憲法第9条に対する態度

自衛隊を違憲とみるか否かは、依然として戦後政治における最大の争点のひとつであり続けている。社公民連合政権構想の最大のネックのひとつもここにある。しかし、これまで違憲論を守ってきた社会党は、これを捨てないまでも、連合政権下においては自衛隊を認める

表Ⅰ－11　憲法第９条に対する態度

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
改定反対	56.0	65.4	55.5	62.8	58.2	51.7	60.7	55.1	61.2	57.1	64.2	73.4	56.5	66.4	59.3
どちらともいえない	30.3	24.3	32.9	25.6	28.4	30.8	26.1	31.4	25.3	25.5	29.5	21.4	35.8	26.5	31.0
改定賛成	12.8	8.9	10.6	9.7	11.9	16.6	11.5	12.5	11.9	16.3	5.7	4.3	6.5	4.9	8.0

ところまでは公式に決定するにいたっている。さらに社会党右派勢力では自衛隊合憲論も台頭している。したがって、参議院選挙において社会党は、争点をほぼ消費税一本にしぼり自衛隊問題は争点としては掲げなかった。このような事情の下で、学生たちのこの問題に対する意識はどのようになっているのであろうか。

「改定反対」は56.0%で前回より約９ポイント落ち、「どちらともいえない」が30.3%で前回より６ポイント上り、「改定賛成」も12.8%で約４ポイント上がっている。前回調査の際は、いわゆる防衛費１%問題が大きくマスコミに取り上げられ、突破反対のキャンペーンが行われていたことを考慮すれば、今回の結果はある意味では当然のことといえよう。今回の結果は大体1985年の水準に等しい。

男女別では、「改定反対」で女子は男子を12ポイント以上も上回って64.2%となり、逆に「改定賛成」では男子の約３分の１の5.7%となり、女子の憲法第９条支持の態度がはっきり現れている。このような傾向は、毎回の調査で示されるところである。

大学別では、それぞれの上位は「改定反対」で帝塚山短期大学68.5%、三重大学64.7%、「どちらともいえない」で、三重短期大学42.1%、大阪産業大学37.5%、「改正賛成」で大阪大学17.6%、大阪産業大学16.6%となっている。

(12)　自衛隊に対する態度

表Ⅰ－12　自衛隊に対する態度

(%)

	全体					男					女				
	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年	89年	87年	85年	83年	81年
解散すべき	15.7	14.4	13.7	13.6	15.0	15.7	14.9	14.0	14.9	18.2	15.8	13.4	12.8	10.4	11.9
縮小すべき	37.8	22.2	9.4	32.9	23.3	35.4	18.6	10.3	28.2	18.2	42.5	28.6	7.7	43.3	28.3
現状のまま	32.9	47.8	58.3	34.7	37.8	36.4	51.3	57.4	36.9	38.2	25.6	41.4	60.5	29.9	37.2
強化すべき	3.8	5.7	8.8	9.5	13.0	5.2	8.0	11.3	11.5	17.6	1.0	1.7	3.7	4.9	8.8
わからない	9.2	9.3	9.7	8.9	10.5	6.5	6.4	6.8	7.8	7.5	14.2	14.6	15.3	11.6	13.1

今回初めて、「解散すべき」15.7%と「縮小すべき」37.8%との合計が53.5%と過半数を越した。「強化すべき」3.8%は過去で最低の記録である。国際的なデタントの反響をここにも見ることができる。しかし、前項における「改定賛成」の増加とは少し矛盾する。

男女別では、あまり差異はみられないが、「縮小すべき」で女子は７ポイントほど男子を上回って42.5%、「強化すべき」で女子は1.0%にまで下がった。「わからない」では女子が14.2%で男子の２倍以上になっているが、これも毎回の調査に現れる傾向である。

大学別では、「縮小」と「解散」の合計で、トップは三重大学64.4%である。

(13) 軍事予算に対する態度

表Ⅰ—13　軍事費の対ＧＮＰ比１％突破問題に対する態度

(%)

	全体			男			女		
	89年	87年	85年	89年	87年	85年	89年	87年	85年
１％突破支持	6.3	7.2	10.0	8.6	10.1	11.6	2.1	1.7	6.5
１％以内なら支持	29.3	33.9	31.2	29.5	34.5	31.7	28.2	33.4	30.4
１％でも多過ぎ削減すべき	38.2	33.2	30.8	37.0	30.3	29.9	40.7	38.3	32.7
ゼロにすべき	13.9	15.4	12.6	12.7	16.3	13.0	16.3	14.0	13.6
わからない	12.2	10.0	15.2	12.0	8.5	13.6	12.7	12.6	18.5

軍事費問題でも、今回初めて「１％でも多過ぎ削減すべき」38.2%と「ゼロにすべき」13.9%の合計が過半数を越えた。しかもこれまで「１％以内なら支持」が第１位であったのが逆転し、今回は「１％でも多過ぎ削減すべき」が９ポイント近くの差をつけて第１位となった。当然「１％突破支持」はこれまでで最低の6.3%となった。これに「１％以内なら支持」29.3%を加えると35.6%となるが、前２回の調査では共に40%を越えていた。これらの原因については、「自衛隊に対する態度」の場合と同じとみて差しつかえあるまい。

男女別では、男子の場合、「削減」と「ゼロ」の合計が49.7%でわずかであれ50%を割るのに対して女子の場合は57%にも達する。前回も女子の場合は過半数を越していたが、今回はなお５ポイント近く上昇している。

大学別では、「削減」と「ゼロ」の合計でトップは三重大学64.7%、一方、「１％突破支持」で大阪大学だけが10%を越し12.2%となっている。

(14) 原子力発電に対する態度

表Ⅰ—14　原子力発電に対する態度

(%)

	全体			男			女		
	89年	87年	85年	89年	87年	85年	89年	87年	85年
新設・増設にも賛成	12.6	21.5	35.8	17.5	28.2	43.8	3.4	8.9	20.2
新設・増設反対、現状維持	39.4	40.6	33.0	36.0	37.7	26.8	46.1	46.3	45.5
一切反対	27.5	13.4	9.6	26.6	12.3	10.8	28.8	15.1	7.4
わからない	19.3	23.7	20.8	18.1	21.2	17.8	21.5	28.6	26.7

原子力発電に対する態度では80年代後半、顕著な変化が現れている。原発に「一切反対」が85年時より約３倍、87年時より２倍弱増加し、27.5%に達した。「現状維持」39.4%と「わからない」19.3%とは、前回とほとんど変わりない。だから当然「新設・増設にも賛成」が激減して12.6%となり、これは85年時の約３分の１、87年時の半分強となっている。反原発の風は次第に強くなり始めているようだ。

男女別では、「新・増設賛成」で男子が17.5%であるに対して、女子は3.4%と極端に低い。

「現状維持」では、女子が46.1%で男子を10ポイントほど上回っている。

大学別では、「一切反対」のトップが三重大学39.9%、「新・増設賛成」のトップが大阪大学19.7%であるが、前回よりは10ポイント低下している。

今回の調査結果では、これまでとはかなり違って、学生のあいだに再び政治への関心が甦り、野党に対する支持が回復しはじめたかのような諸徴候が随所に現れている。だが、これが果たして持続的な傾向か否かについての判断を下すには暫く時をまたねばならない。というのも、90年総選挙は89年参議院選挙からわずか半年余りしか経過していないにもかかわらず自民党に大勝利を与え、有権者の政治意識に大きな変化が生じていたことを示しており、したがって、もし90年に学生社会意識調査を実施していたとすれば、恐らく今回とはかなり違った結果も出ていた筈だからである。有権者の政治意識は移ろいやすく、学生の場合も同様である。繰り返して確認するように、学生の政治的関心度の高まりもまたその低下も結局は社会のそれの反映であることを意味している。

大人たちはともすれば、現代の学生の政治や社会に対する関心度の薄さや消極姿勢を嘆いてみせる。だが、それはつまるところ天に唾するのと変わらず、大人たちがまずは自らの姿勢を改め、学生の関心に足る政治を実現することこそ肝要といえよう。

第Ⅱ部　余暇と読書

(1)　余暇の過ごし方

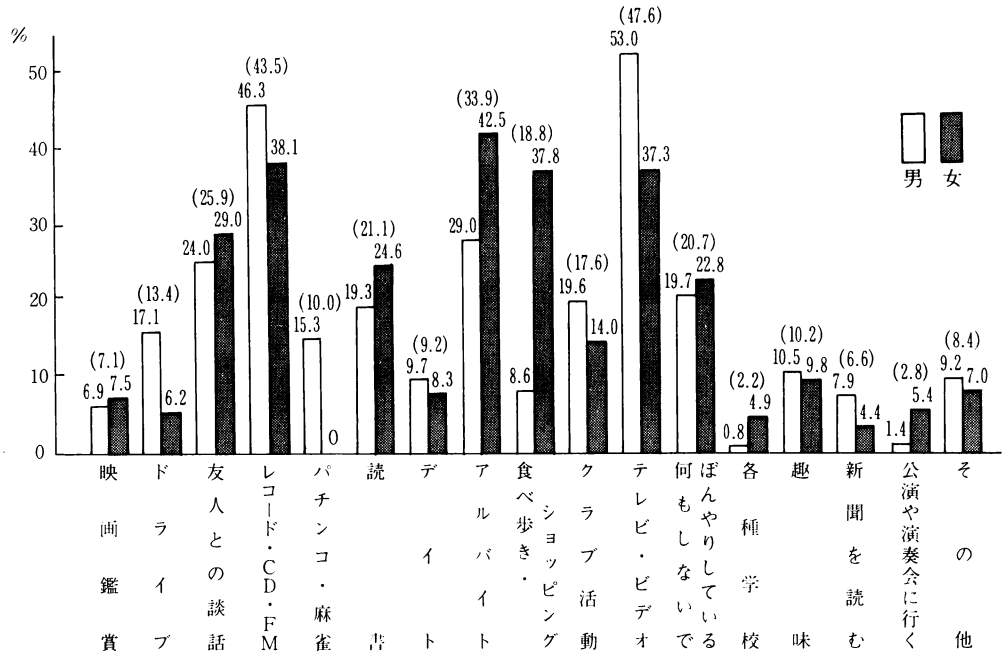
余暇の過ごし方（17項目中３つまで選択回答）については、今回の調査から、「レコードやＦＭ放送を聴く」の項目に「ＣＤ」を追加し、また「テレビを見る」の項目に「ビデオ」を追加した。前回の分析で指摘されたように、80年代には、新しいオーディオ機器の開発と普及が目覚ましく、またテレビの用途も著しく多様化したため、経年比較を考慮したうえでも、追加はやむをえなかった。

その結果、前回に初めて、しかも群を抜いて１位（47.1%）となった「テレビを見る」が、今回も「テレビ・ビデオを見る」となって、予想どおり１位（47.6%）であった。しかし、今回はそれが群を抜いてはいない。前回初めて、逆転されて２位（37.7%）に落ちた「レコードやＦＭ放送を聴く」が、「レコード・ＣＤ・ＦＭ放送を聴く」となって、大幅にポイントを上げ、２位（43.5%）で続いている。そして全体としては、この両者が抜きんでている。３位は、33.9%で「アルバイトをする」であった。上位３項目の順位は、前回と同じであった（図Ⅱ－１）。

これを要するに、ビデオの追加分はあまり影響をもたなかったが、ＣＤの追加は、前回の疑問を解消するだけの効果を示したと言ってよいであろう。第１回から第４回まで連続して１位として示された学生の高い音楽愛好度は、前回の急落を度外視して相変わらず維持されていると見るべきであり、テレビ・ビデオと音楽に、あるいはアルバイトに、学生の一般的な余暇の過ごし方を見ることができる。

この一般的な傾向の内訳を、性別で見てみると、テレビ・ビデオは、特に男子学生では

図Ⅱ－1　余暇の過ごし方



表Ⅱ－1　余暇の過ごし方（大学別）

	1　位	2　位	3　位	4　位
大阪産業大学	テレビ・ビデオ 53.8%	CD・FM 45.8%	アルバイト 33.8%	ドライブ 29.8%
大阪経済大学	アルバイト 47.4%	CD・FM 41.0%	テレビ・ビデオ 38.5%	友人との談話 29.5%
大阪大学	テレビ・ビデオ 54.2%	CD・FM 42.4%	読書 34.0%	クラブ活動 29.4%
三重大学	CD・FM 47.6%	テレビ・ビデオ 42.7%	アルバイト 32.5%	友人との談話 30.4%
帝塚山短期大学	アルバイト 49.5%	シッョピング 37.8%	テレビ・ビデオ 35.1%	CD・FM 31.5%
三重短期大学	アルバイト 53.9%	テレビ・ビデオ 46.1%	CD・FM 42.1%	ショッピング 40.8%

53.8%（前回51.9%）と高率であった。女子学生では37.3%（前回38.0%）であったから、テレビ・ビデオは、とりわけ男子学生に特徴的な余暇の過ごし方である。その逆に、アルバイトに関しては、女子42.5%（前回38.9%）に対して、男子29.4%（前回24.5%）であったから、これは相変わらず女子学生に特徴的な傾向を示している。

上位3項目のほかでは、4位「友人との談話」(25.9%)、5位「読書」(21.1%)、6位「何もしないでぼんやりしている」(20.7%）の順になっており、前回の調査と比較すると、4位と5位とが入れ替わっている。「読書」については、順位を下げたうえに、大学間の格差が大きかった。例えば大阪大学の34.0%に対して、わが大阪産業大学は10.2%であった。

ちなみに、大阪産業大学では、上位3項目は一般的な傾向を示しているが、4位に「ドライブ・ツーリング」(29.8%)、5位に「友人との談話」(24.0%)、6位に「何もしないでぼんやりしている。」(21.2%）と続き、7位に「パチンコ・麻雀」(16.6%)、8位に「デイトをする」(11.1%)、そして9位に「写真などの趣味」と「その他」が並び、やっと11位に「読書」が顔を見せている。テレビ番組の多様化や各種ビデオ教材等の普及があって、テレビ・ビデオを見ること自体については、それが上位にあっても当然という感想を抱かせるであろうが、余暇には読書するという学生像が浮かんでこないところには、やはり一抹の淋しさを覚える（表Ⅱ－1）。

(2) 一週間の時間の使い方（表Ⅱ－2）

「一週間に何時間読書をしますか」という問いに対しては、「3時間未満」との回答が41.9%（男42.8%、女40.2%）と最も高く、続いて「3～14時間未満」が34.0%（男31.3%、女39.1%)、そして「0時間」が16.2%（男18.9%、女11.4%）であった。累積して92.2%が、14時間未満と答えている。この結果は、驚くべきことかもしれないが、上述の余暇の過ごし方からして、驚くにあたらない。全体として読書時間は、前回よりさらに減少しつつある。これを推し進めているのは、「0時間」回答の増加である。男子の18.9%（前回13.5%）は、いかにも高い。しかも、驚くなかれ、ここでもやはり、わが大阪産業大学は24.3%と、他大学を圧倒している。本学の場合「3時間未満」の累積が73.8%に昇っている。

これと関連して気に掛かるのが、テレビ・ビデオの視聴時間である。回答は、第3回以来「3～14時間未満」に集中する傾向があると前回指摘されたとおり、今回もそれが1位で45.2%（男42.1%、女51.0%）であった。第3回以来、男子学生では、32.0→40.5→41.8→42.1と、その比率が高まり、女子学生でも、43.7→45.2→46.0→51.0と、ますますその高率化が進んでいる。週14時間以上テレビ・ビデオを見る学生は、男子では4割を越えており、女子でも今回は3割を越えた。また大阪産業大学を引き合いに出してみると、「0時間」と答えた者がわずか1.5%であったのに対して、「28時間以上」と答えた者が12.3%に昇っている。14時間以上との回答を累積すると、52.0%に達する。上の読書時間とこれとを重ねあわせて、いったい何と評すればよいであろうか。いずれにせよ、本学が、読書時間の減少と、テレビ・ビデオ視聴時間の増大に「貢献」していることは確かである。

学生の高い音楽愛好度が維持されていたことは先に指摘されたとおりであるが、そのことは、一週間の時間の使い方によっても確かめられる。音楽時間は、前回特に女子の場合「3時間未満」との回答が1位（38.0%）であったのに対して、今回は「3～14時間未満」が再

表Ⅱ－2　一週間の時間の使い方

(%)

		0　時　間	3時間未満	3時間～14時間未満	14時間～21時間未満	21時間～28時間未満	28時間以上
読　　書	男	18.9	42.8	31.3	4.1	1.8	0.7
	女	11.4	40.2	39.1	6.2	1.6	1.6
テ　レ　ビ	男	2.9	11.3	42.1	21.7	13.4	8.6
	女	2.8	16.1	51.0	17.9	7.5	4.7
CD・FM	男	8.3	24.3	40.4	14.8	5.8	6.2
レコード	女	8.0	30.8	41.5	11.7	5.2	2.8
クラブ活動	男	49.8	10.6	24.1	8.1	2.2	3.6
	女	51.8	16.6	26.2	2.6	1.8	0.8
アルバイト	男	49.9	5.2	23.0	10.2	4.6	6.1
	女	32.9	7.5	33.7	17.6	4.1	3.1

び1位（41.5%）であった。全体としても、「3時間未満」が減少し、「3～14時間未満」に集中（40.8%）する傾向に戻った。いまやテレビ・ビデオによっても質の高いステレオ音楽が楽しめる時代であり、部屋に籠もってレコードを聴くよりも歩きながらCD・カセットで音楽に囲まれている時代である。一昔前ならば、読書しながらレコードを聴くとか、FM放送を聴きながら読書するとかの学生像が思い浮かんだものであるが、一方で音楽が移動する時代となって、他方で音楽が映像と一体化する時代となって、それらの分だけ読書時間が圧迫されているように思える。ちなみに読書時間が少なかった大学では、音楽を聴かない学生が少なかった。例えば、本学では、週間読書時間が3時間未満である者の比率が7割を越えていたのに、音楽時間が3時間未満である者のそれは3割に充たなかった。その逆に、読書時間が比較的に多かった大阪大学では、音楽時間が3時間未満である者の比率が4割を越えていた。すなわち、読書と音楽とは、並行的関係よりも、むしろ排他的関係のほうを強めている。そしてこのことがおのずから、後述の読書と音楽との種類を暗示している。

クラブ活動については、男女ともほぼ5割が「0時間」と回答した。参加率はやや回復した。そしてクラブ活動をしている者のうち約5割（全体の24.9%）が「3～14時間未満」と回答した。この比率は変わっていない。

アルバイトについては、男子ではほぼ5割が、女子で3割強が「0時間」と回答した。全体としてアルバイト従事率は高まっており、しかも男子よりも女子のほうが高い傾向が続いている。時間数は「3～14時間未満」が1位で、従事者の5割に近い。従事者の16.8%（全体の9.4%）は、週21時間以上アルバイトをしている。なお、本学では、「0時間」回答は、約5割で平均的であったが、全体の17.0%（従事者の34.2%）が週21時間以上アルバイトに時間を割いているという結果がでている。

(3) テレビ・ラジオ番組

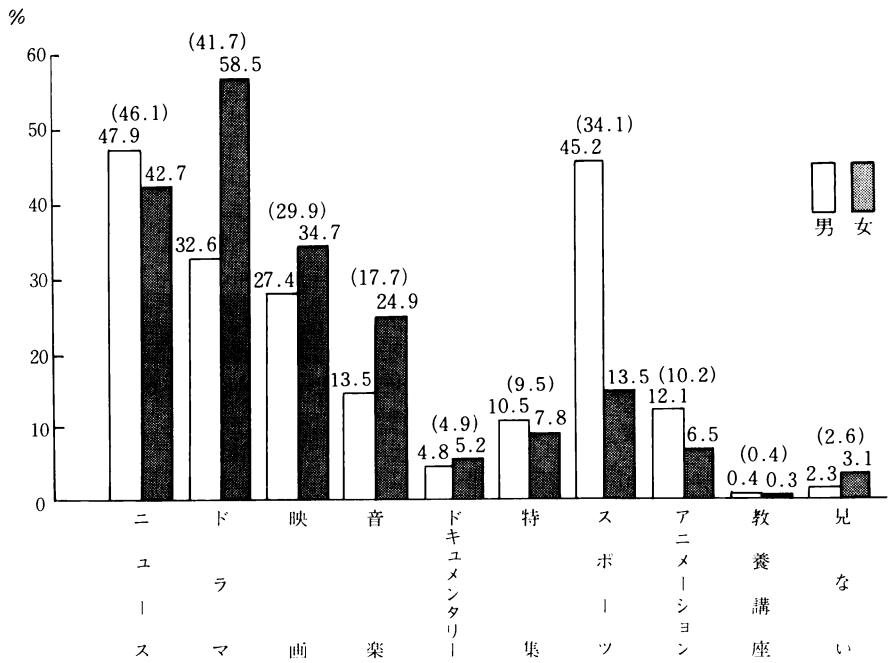
よく見るテレビ番組の1位は、前回の急上昇の勢いを受けて、ついにこの10年間で初めて「ニュース」となった。それも46.1%という高率である。数年前は、それが3割を越えるか越えないかで、学生の社会意識が懸念されたものである。しかし、3年ほど前から各テレビ局のニュース番組に工夫がこらされ、キャスターの個性化と情報の多様化が進み、情報化時代の波にのって一種のブームというべきものが到来した。先に明らかにされたとおり、現代学生は実によくテレビを見るのであり、そしてニュースの視聴率がこの高率である。学生の関心が変わったというよりも、番組の内容が変わったというべきかもしれないが、これはともかくも歓迎されるべき現象であろう。

「ニュース」に続いては、「ドラマ」41.7%、「スポーツ」34.1%、「映画」29.9%、「音楽」17.4%が高視聴率であった（図Ⅱ－2）。これらが上位の人気番組であることは変わっていない。

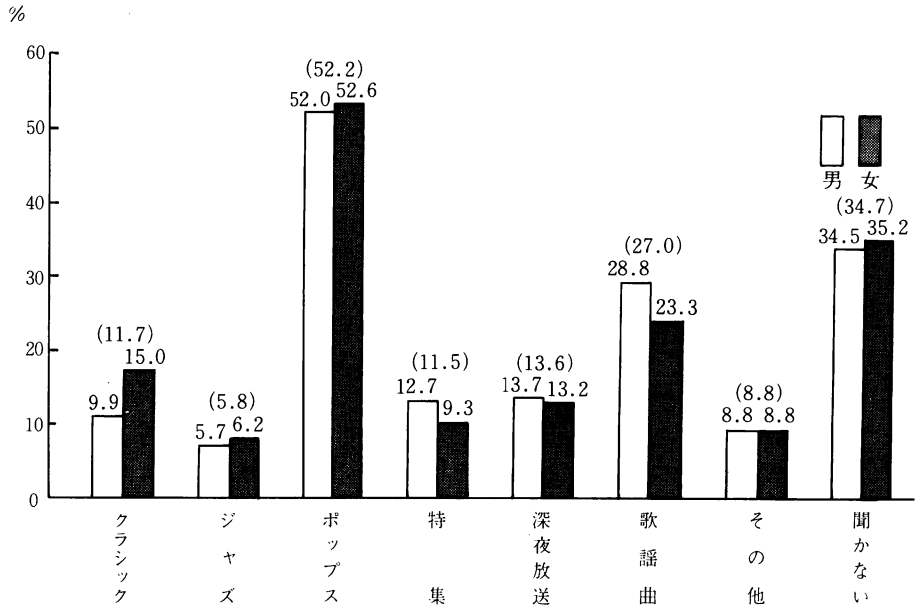
ただし、それらに関しては毎回男女差が著しく、また今回は特に男子において順位の変動が大きかった。男女差は、特に「ドラマ」（男32.6%、女58.5%）と「スポーツ」（男45.2%、女13.5%）に見られる。この傾向は一貫している。また男子では前回の順位が「スポーツ」、「ニュース」、「映画」、「ドラマ」の順であったのに、今回は「ニュース」、「スポーツ」、「ドラマ」、「映画」の順に入れ替わっている。女子では「ドラマ」、「ニュース」、「映画」、「音楽」の順で、変化はなかった。このようにして、男女差なく高視聴率を得て、しかも男子で前回比12.2ポイントの大幅な上昇を得て、ニュース番組が1位になった次第である。

なお、以上のような変化のなかで、本学の学生は「ドラマ」を1位（42.8%）に、「スポーツ」を2位（42.5%）に、そして「ニュース」を3位（33.2%）に選んでいることを付け加えておこう。

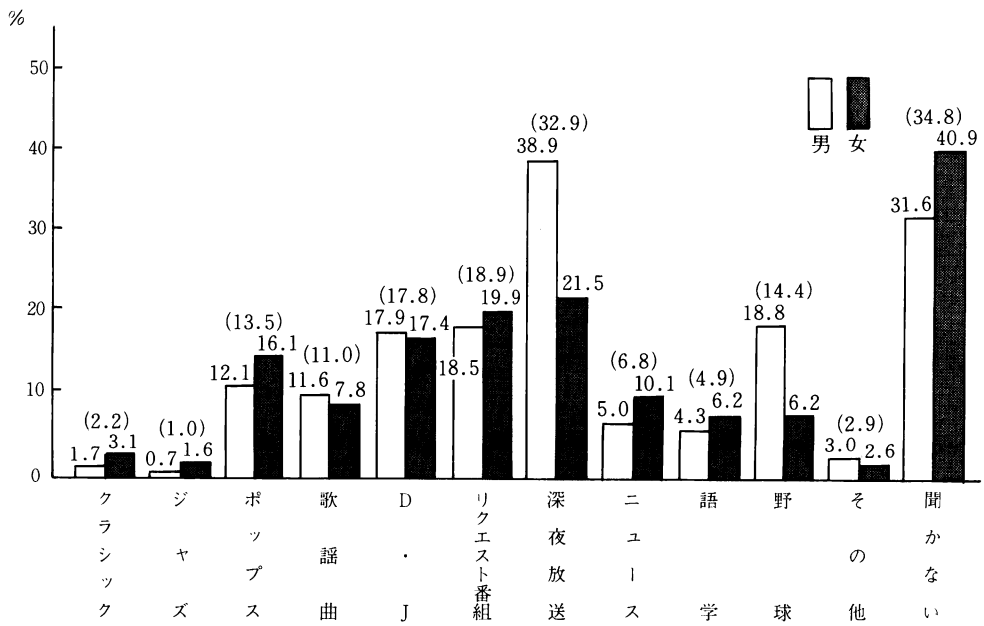
図Ⅱ－2　よく見るテレビ番組



図Ⅱ－3　よく聞くＦＭ番組



図Ⅱ－4　よく聞くＡＭ番組



ラジオ番組のうち、ＦＭ放送については、今回の特徴としてまず「聞かない」との回答が、前回の27.7％（男25.5％、女31.1％）から更に増加して34.7％（男34.5％、女35.2％）に昇ったということが挙げられる。よく聞かれている番組としては「ポップス」の52.2％（男52.0％、女52.6％）が抜けていて、２位にはまた人気を下げたが「歌謡曲」の27.0％（男28.8％、女23.8％）、３位には逆に人気を上げて「深夜放送」の13.6％（男13.7％、女13.2％）が続いている。こうしてみると、「聞かない」層の増大の理由は、音楽はＦＭ放送でなくともよいということであろうか。前回人気を高めた「クラシック」は、どうしたことか今回また不人気（11.7％）であった（図Ⅱ－３）。

ＡＭ放送についても、「聞かない」層が前回の24.7％（男23.7％、女26.3％）から今回は34.8％（男31.6％、女40.9％）になって、女子学生ではついに４割を突破した。よく聞かれている番組としては「深夜放送」の32.9％（男38.9％、女21.5％）が目立つ程度で、「リクエスト番組」や「Ｄ・Ｊ」にしても今回はポイントを下げて２割をきった。いまや学生にとってラジオといえば「深夜放送」のイメージが強い。それも特に男子学生にとってである。ちなみにまた、深夜放送を一番よく聞いているのは本学の学生（44.6％）であった（図Ⅱ－４）。

さて、余暇活動の分析の最後に、とくにわれわれに気掛かりな大阪産業大学の学生像を反復しておきたい。他大学の学生と比較して本学の学生が最高または最低の比率を顕著に示した項目を整理すると次のようになる。

１）週21時間以上テレビ・ビデオを見る者が50％を越えた唯一の大学
２）テレビ番組では「ニュース」の視聴率が約33％で最低
３）週間読書時間が３時間未満の者が70％を越えて最高
４）週21時間以上音楽を聞く者が約17％で最高
５）ＦＭ放送では歌謡曲を聞く者が約34％で最高
６）ＡＭ放送では深夜放送を聞く者が約45％で最高

(4) 読書傾向と好きな作家

表Ⅱ－３は男子大学生の読書傾向であるが、第１位『ノルウェイの森』第２位『一杯のかけそば』第３位『ゲームの達人』と、今度年は比較的新しい書名が上位にランクされてきている。1980年代、前半から中頃にかけては学生の読書傾向は保守的であり、書店調査のベストセラーなどとあまり一致しないものも多かった。しかし今回は『ノルウェイの森』のようにロングランベストセラーを続けたものが、１位にきているし、女子学生の方でも３位にランクされている（表Ⅱ－４参照）。現代の学生が好みそうな内容とは必ずしも一致しないと筆者は思うのであるが、若い世代のある種の不安といらだち、そして苦い恋愛、性への憧れといったテーマが学生の主人公への同一化をせまるのであろう。軽読書傾向の学生が上・下に別れた長編を買うというのは少し無理をしなければならないであろう。ただこの本に関しては穿った見方をする人もいて、ロングベストセラーを続けている１つの原因は本の装丁にあるらしい。赤とダークグリーンという補色を使い、しかもゴールドの帯がしてある。この組み合せは嫌でも人の目を引くようである。店頭に並ぶ『ノルウェイの森』のイメージは多少書店に足を運ぶ者ならばもうすでに強固に作り上げられているはずである。かく言う筆者

表Ⅱ－3　読んだ本ベストテン
男子大学生

順位	書名	度数
1	ノルウェイの森	22
2	一杯のかけそば	16
3	ゲームの達人	7
	こころ	7
	竜馬がゆく	7
4	人間失格	6
5	燃えよ剣	5
	アルジャーノンに花束を	5
	三国志	5
6	危険な話	4
	宇宙皇子	4
7	銀河英雄伝説	3
	キッチン	3
	ファウスト	3
	友情	3

表Ⅱ－4　読んだ本ベストテン
女子大学生

順位	書名	度数
1	キッチン	23
2	TUGUMI	10
3	ノルウェイの森	8
4	一杯のかけそば	4
5	三国志	3
	氷点	3
	子供の宇宙	3
6	人間失格	2
	こころ	2
	人権を暮らしの中に	2
	銀河英雄伝説	2
	海と毒薬	2

も何か気になってついに買ってしまったという経験を持っているからである。かといって本の内容は損うものでは決してないのであるが、ロングセラーの秘密も、学生に読まれた理由の一因ともなるように思われる。

2位の『一杯のかけそば』も、国会での公明党議員の質問がきっかけになり、全国をかけめぐった話であり、1989年7月の調査時には充分に話題性のあった本である。

3位の『こころ』『竜馬がゆく』は全調査を通して根強い人気のある本である。『ゲームの達人』はシドニー・シェルダンの作であるが、ビデオ化もされており、そちらの方も仲々人気が高いという話である。希代のストーリーテラーといわれる彼の著作はいづれもテンポが早くアイデアがおもしろい。単に野望を抱く男性中心の冒険物語というのではなく、必ず女性的な視点が取り入れられ、物語のバランスがとても良いものが多い。日本では直訳、意訳をこえた超訳なるものでかなり成功をおさめているといえよう。学生にとっては読みやすいエンターティンメントであろう。6位と7位にそれぞれ『宇宙皇子』（うつのみこ）と『銀河英雄伝説』が入っているが、藤川桂介と田中芳樹の著作であり、高校生、大学生に幅広い人気のある作家で、男女を問わずかなり読んでいるようである。いずれも架空のＳＦ小説であるが、現代文明を風刺的に描きだしており、若者の漠然とした憧れや、政治意識が投映されやすい小説である。

次に女子大学生の読書傾向であるが、表Ⅱ－4を見ると、今回は圧倒的に吉本ばななが強

く『キッチン』『ＴＵＧＵＭＩ』いずれも彼女の作品である。日常的なふとした題材をとりあげ云々……という書評もあるが、筆者は日常性―ふとした事―とるに足らない事という連鎖には肯首できない。それは単に男性的世界から見た偏った価値観でしかない。日常的な世界というものが人間にとってすべてのものであるはずなのである。男が天下国家を論ずる前にまず自分をよく見るということから始めなければならない時がきているのである。その意味でこの『キッチン』は意義深い小説であるといえる。キッチンという生の営みを通して、死の不安をのり越えていこうとするプロットは仲々斬新である。またｎ個の性のあり方を通して、父、吉本隆明の影響も色濃くあらわれているといえるであろう。自らのセクシャリティーへのこだわりの少ない若い世代には受入れやすい小説なのであろう。

３位、４位には『ノルウェイの森』『一杯のかけそば』がランクされ、男子大学生の傾向とよく似ている。『こころ』『三国志』なども、本調査の中ではいつもランクされる本である。『子供の宇宙』や『人権を暮らしの中に』等は、三重大に偏りがあるため、これらは授業の中で教師が何らかの情報を与えたものと思われる。大学の教師は読書案内をしても、つい自分の専門に近い本の紹介をしがちであるが、むしろ一読書人として幅広い情報を学生に与えた方が学生にとっては良いのではなかろうかと思われる。事実、大学によっては教師が紹介したのではないかと思われる書名があらわれてくる。例えば『海と毒薬』や『危険な話』などもその中の１つではないかと思われる。

・好きな作家

表Ⅱ－５は男子大学生の好きな作家ベストテンである。赤川次郎は1985年以降ずっと、１位にランクされてきたが、今回は女子大学生の方では（表Ⅱ－６参照）吉本ばなながトップであり、男子の方は赤川次郎が依然として１位と変わりない。続いて星新一、司馬遼太郎とランクされている。西村京太郎などは比較的多作の方でもあるし、鉄道を題材にしたものが中心なので話題性もあり男子学生には人気があるのであろう。村上春樹などは『ノルウェイの森』の人気であろうが、夏目漱石、太宰治、吉川英治と古典的な作家に続いて、ニューウェーブというか40才前半の作家である、椎名誠、栗本薫、村上龍といった顔ぶれが８位にランクされてきている。

女子学生の方では、３位に新井素子がランクされているが、第４回調査（1985年）以降女子学生にはかなり人気の高い作家となっている。男子と比較すると、女子では田辺聖子、三浦綾子、山村美紗といった女性作家が常にランクされており、三者三様の女性的感性がやはり女子学生の共感を呼ぶのであろう。田辺聖子は女性のたくましさとヒューマニティー、三浦綾子は、女性の血縁と感情的葛藤、山村美紗は、女性の運命の悲哀としたたかさを推理ドラマに組み立てる。いずれも男性にとってはあまり頓着しないテーマなのであろう。推理作家としては、男子が西村京太郎、女子が山村美紗という対比が成り立つであろう。列車が走ることと旅にロマンを感じる男と、人生という旅の中でルサンチマンを募らせる女の、それぞれの共感性をよくあらわしているといえるであろう。同じ推理作家でも夏樹静子の作風は、山村美紗よりややドライでロジカルだと言えよう。そのちがいが、女子学生の好みにあらわれるのであろう。

男子の方では９位、女子の方では７位にランクされている田中芳樹は、前述したように『銀河英雄伝説』がよく読まれているのであろう。

表Ⅱ－5　好きな作家ベストテン
男子大学生

順位	作家	度数
1	赤川次郎	45
2	星新一	20
	司馬遼太郎	20
3	西村京太郎	18
4	村上春樹	17
5	夏目漱石	14
6	太宰治	10
7	吉川英治	8
	落合信彦	8
8	椎名誠	7
	栗本薫	7
	村上龍	7
9	田中芳樹	6
10	森村誠一	5

表Ⅱ－6　好きな作家ベストテン
女子大学生

順位	作家	度数
1	吉本ばなな	24
2	赤川次郎	17
3	新井素子	11
4	星新一	9
	村上春樹	9
5	栗本薫	8
6	田辺聖子	7
7	田中芳樹	6
	太宰治	6
	三浦綾子	6
8	山村美紗	3
	北杜夫	3
	宮本輝	3
	遠藤周作	3

これは、スペースオペラと銘打った壮大な物語であるが、しっかりした文章力と構成によって面白い読み物になっている。おそらく構成にはコンピュータが用いられているのであろう。ドラゴンクエストなどが登場する時代では、一人の手作業では仲々追いつかなくなっているという感はある。しかし登場人物がステレオタイプになってくる危険性はこのタイプの小説ではいつもある。『スターウォーズ』を思わせるような物語である。このような形式をとると、国家の機構や政治思想のあり方、またいくつかの国の連合体のあり方などをかなり自由に設定できるので、その中には現実論は無視して政治批判、思想批判を組み込むことができる。さしあたっては平和な日本に住む現代の学生が抱きやすい政治、思想批判をうまく展開させることによって、彼等の共感を得るのであろう。

(5) 雑誌傾向

表Ⅱ－7は男子大学生、表Ⅱ－8は女子大学生のよく読む雑誌のベストテンである。これを見ると男子は相変わらずマンガ漬け、女子はアンノン族である。これは1980年代の学生の雑誌傾向としては不変の傾向といえるのではなかろうか。

9位までがマンガで占められており、『ホットドッグプレス』『ぴあ』『FMステーション』すべて情報誌と言ってよいものである。マンガと情報。学生が雑誌に求めるものはこれがすべてと言っても過言ではないかも知れない。

もちろん雑誌に求められているものはすべてある種の情報ではあるが、社会情報、政治情報、科学情報といった種類に分けるとすれば、男子学生はファッション情報、娯楽情報、音

表Ⅱ－7　雑誌ベストテン
男子大学生

順位	雑誌	度数
1	週刊ジャンプ	144
2	少年ジャンプ	132
3	少年サンデー	105
4	週刊ヤングジャンプ	76
5	週刊マガジン	64
6	ビッグコミックスピリッツ	54
7	少年マガジン	52
8	ヤングマガジン	31
9	ホットドッグプレス	24
10	ぴあ	22
10	FMステーション	22

表Ⅱ－8　雑誌ベストテン
女子大学生

順位	雑誌	度数
1	ノンノ	110
2	アンアン	35
3	キャンキャン	34
4	オレンジページ	30
5	J.J.	29
6	LaLa	20
7	少年ジャンプ	18
8	別冊マーガレット	17
9	more	15
10	花とゆめ	14

楽情報を求めているということになるであろう。11位に『ニュートン』(度数17) がきているが、度数の内訳は三重大学4、大阪大学13となっており、主に大阪大学に偏っている。新人類とはいえ、しかし、、あまりに平和すぎはしないだろうか。いわば今の日本の学生は無風状態の中で育ちすぎているのではなかろうか。〝しらけ〟も度がすぎると無批判と惰性に流れてしまう。

男子の傾向の中で1985年の第4回調査から経年的に見てみると、少し気になる事がある。それは、週刊のコミック誌の増大である。ビッグコミックスピリッツなどは月2回のテンポであるが、これであればまず質的にはそう落とさずにすむのであろうが、週刊となるとこれは作る方も大変なのではなかろうか。事、創作という点に関していえば、この早いテンポはいったい何なのだろうか。読みも読んだり、書きも書いたりという観がある。

ちなみに第4位の週刊ヤングジャンプには大人気の『孔雀王』が連載されている。これは、映画化もされたものだが、着眼点、構想などは仲々面白いものであるが、ともかく無駄にストーリーをつなぎ、次から次へと読者をひっぱろうとするプロットに満ち満ちている。その意味で大変エキサイティングな代物である。膨脹拡大傾向というか、あたかもギャンブルをする人の射幸心を煽るようなところがある。読ませる本というのは多かれ少なかれそれはあるし、またなくてはならないものなのだが、この週刊コミックにおいては、より強い刺激にしか反応しなくなった中毒患者を作っていくような観がある。人間の果てしない欲望を果てしなく作りだす日本の経済主義をここにかい間みた気がする。無限の拡大再生産をくり返していく日本の産業界の前に社会倫理はない。工業生産品は言うに及ばず、教育産業、子供向け商品、出版そして地上げ、早いテンポでより売れる物を作り続けざるを得ない悪循環は一体どこまで行くのであろうか。学生たちはもはやコミックを読んでいるのではなく、読まされているのだ。やがて彼等はジャパニーズビジネスマンとなり儲けるためならば一円入札も

辞さない会社の一員となって行くのだろうか。社会倫理は世の大人が実践しなければならないはずなのに。その範を垂れる者は企業の中にも政治の中にもないのが現代の日本の若者が生きている現実なのではなかろうか。

一方、表Ⅱ－8の方をみてみると、女子の傾向で少し変わったものが見られる。それは、第4位の「オレンジページ」である。これは現在最も売れているといわれている雑誌である。もちろん女性をターゲットとしたものであるが、内容は豊かであり、家庭を中心とした文化の様々な側面からの情報が盛られており、そのうえ、プラクティカルなノウハウもあり有用な雑誌として重宝されているのであろう。おそらく、10代から50代くらいの女性に読まれていると思われる。少なくとも週刊コミックよりははるかに有用で、現実感のある雑誌である。また月刊であるため充分に練られた内容をもっているといえよう。

表6回　学生の社会意識調査

※　答は、すべて回答用紙に記入して下さい。

Q　（1）　あなたは日本の政治のありかたに満足していますか。

1．非常に満足　2．やや満足　3．どちらともいえない　4．やや不満　5．非常に不満

↓Q（3）へ　↓Q（2）へ

Q　（2）　あなたが、日本の政治に満足しているといえない理由を、次のうちから2つ選んで下さい。

1．物価高などで生活が楽にならないから
2．汚職や選挙違反など、不明朗なことが多いから
3．派閥争いなど、政党の活動がみにくいから
4．平和と民主主義を守る努力が払われていないから
5．政党や政治家が党利・党略や私利・私欲だけを追求しているから
6．公害などで快適な自然環境が保障されていないから
7．受験地獄が続くなど、適切な文教政策がとられていないから
8．社会福祉政策が不十分だから
9．その他

↓Q（3）へ

Q　（3）　あなたは、日本の政治にどの程度関心をもっていますか。

1．非常に関心をもっている　2．多少関心をもっている　3．あまり関心をもっていない　4．ほとんど関心をもっていない

↓Q（4）へ　↓Q（5）へ

Q （4） あなたが、日本の政治に関心をもつ一番大きな理由を、次のうちから一つ選んで下さい。

1．自分の生活に関係するから
2．平和と民主主義を守るため
3．地域社会の発展に関係するから
4．政治家や政党の動きが面白いから
5．その他

↓Q（6）へ

Q （5） あなたが、日本の政治に関心をもっていない一番大きな理由を、次のうちから1つ選んで下さい。

1．自分の生活に関係がないから
2．個人の意見は政治に何の影響も与えないから
3．政治の問題も難しくてよくわからない
4．政治に関心をむける暇がない
5．まだ選挙権がないから
6．その他

↓Q（6）へ

Q （6） あなたは、いま支持する政党がありますか。

1．ある
↓Q（7）へ

2．ない
↓（8）へ

Q （7） あなたが一番支持する政党は次のうちどれですか。1つ選んで下さい。

1．自民党
2．社会党
3．公明党
4．共産党
5．民社党
6．社会民主連合
7．第二院クラブ
8．無党派市民連合
9．MPD平和と民主運動
10．その他

↓Q（9）へ

Q （8） あなたが支持する政党がない一番大きな理由を、次のうちから一つ選んで下さい。

1．議会制における政党そのものに意味がないから
2．政党の政策に大した違いがないから
3．どの政党も自分の意見や利益を代表してくれないから
4．政党は派閥争いや党利・党略の追求に終始しているから
5．汚職や選挙違反などと全く関係のない清潔な政党がないから
6．政党がどのような主張をしているかわからないから
7．その他

↓Q（9）へ

Q （9） あなたは、憲法第9条についてどう思いますか。

1．改定すべきである　　2．どちらともいえない　　3．改定すべきではない

Q (10) あなたは、現在の自衛隊についてどう思いますか。

1．解散すべきである　2．縮小すべきである　3．現状のままでよい

4．もっと強化すべきである　5．わからない

Q (11) 日本の軍事予算の対ＧＮＰ比１％突破問題について、おなたはどう考えますか。

1．１％突破は当然だから支持する　2．１％以内に抑えれば支持する　3．１％でも多すぎるから、軍事予算は大幅に削るべきである

4．軍事予算はゼロにすべきである　5．わからない

Q (12) あなたは、原子力発電についてどう考えますか。

1．新設・増設にも賛成　2．新設・増設には反対だが、現状のままなら賛成　3．一切反対　4．わからない

Q (13) あなたは、余暇を主にどのように過ごしていますか。次のうちから３つ選んで下さい。

1．映画鑑賞　2．ドライブやツーリングをする　3．友人との談話

4．レコード・ＣＤやＦＭ放送を聞く　5．パチンコや麻雀をする　6．読　書

7．デイトをする　8．アルバイトをする　9．食べ歩きやショッピング

10．クラブ活動　11．テレビやビデオを見る　12．何もしないでぼんやりしている

13．各種学校（英会話・コンピュータ・その他稽古事を含む）に行く　14．写真など趣味にうちこむ

15．新聞を読む　16．公演や演奏会に行く　17．その他

Q (14) あなたは、次のことに一週間のうち何時間を費しますか。

	0 時 間	3時間未満	3時間～14時間未満	14時間～21時間未満	21時間～28時間未満	28時間以上
A 読 書	1	2	3	4	5	6
B TV・ビデオ	1	2	3	4	5	6
C FM・CD・レコード	1	2	3	4	5	6
D クラブ活動	1	2	3	4	5	6
E アルバイト	1	2	3	4	5	6

Q (15) あなたはテレビやラジオのどのような番組をよく見たり聞いたりしますか。それぞれについて2つ選んで下さい。

A テレビ　1．ニュース　2．ドラマ　3．映画　4．音 楽　5．ドキュメンタリー
6．特 集　7．スポーツ　8．アニメーション　9．教養講座　10．見ない

B ラジオ
- イ FM　1．クラシック　2．ジャズ　3．ポップス　4．特 集
  5．深夜放送　6．歌謡曲　7．その他　8．聞かない
- ロ AM　1．クラシック　2．ジャズ　3．ポップス　4．歌謡曲
  5．D・J　6．リクエスト番組　7．深夜放送　8．ニュース
  9．語 学　10．野 球　11．その他　12．聞かない

Q (16) あなたは新聞を毎日読みますか。

1．必ず読む　2．大体読む → Q (17) へ

3．あまり読まない　4．ほとんど読まない → Q (18) へ

Q (17) あなたが一番興味をもって読む紙面はどこですか。1つ選んで下さい。

1．政治・経済　2．社 会　3．スポーツ　4．家庭・婦人
5．文化・科学　6．その他

→ Q (18) へ

Q　(18)　あなたが、最近読んで印象に残った本を一冊あげて下さい。

Q　(19)　あなたが、好きな作家を１名あげて下さい。

Q　(20)　あなたが、よく読む雑誌（コミックを含む）を３つあげて下さい。

フェース・シート

(1) 性　別

1．　男　　2．　女

(2) あなたが、在学する大学名を教えて下さい。

1．三重短期大学　2．大阪産業大学　3．三重大学　4．帝塚山短期大学
5．大阪大学　6、大阪経済大学

(3) あなたの家族の家計維持者の職業は何ですか。（備考参照）

1．事務職　2．管理職　3．労働者(産業)　4．労働者(商店員など)
5．自営商工業者　6．自由業者　7．農林水産業者　8．その他、無職

(4) あなたの家族全体で昭和59年の１カ年のボーナスを含めた所得は、手取額で、次のうちどのくらいですか。

1．100万円未満　2．100万—150万円未満　3．150万—200万円未満
4．200万—250万円未満　5．250万—300万円未満　6．300万—350万円未満
7．350万—400万円未満　8．400万—450万円未満　9．450万—500万円未満

（備　　考）

① 事　務　職

事務・技術関係の公務員、公共企業体職員、会社員、教員、研究員、医師、航空士など専門的技術者。

② 管　理　職

管理的公務員、民間会社の課長以上、および大企業の役員、法人役員、教育や医療機関の長。

③ 労働者（産業）

加工、組み立てなどの生産工程従事者、採鉱従事者、運輸通信業務従事者、水上運輸機関従事者。

④ 労働者（商店員など）

店員、化粧品その他のセールス、集金人、家政婦・ウェートレス・調理人・理容師・劇場従業員・警備員など各種サービス業従事者、大工・左官など建築土木の現場労働者、建具・指し物など職人、飲食料品製造従事者、器具その他の修理作業従事者、荷作り・運搬従事者。

⑤ 自営・商工業者

個人企業・中小企業・商店の経営者、自営している税理士、助産婦、大工・左官の親方、個人タクシー運転手、貸家業。

⑥ 自　由　業

絵画・彫刻など芸術家、音楽家、生け花・茶道などの師匠、各種デザイナー、俳優、園芸家、文芸家、著述家、宗教家、弁護士、開業医。

⑦ 農林漁業者

⑧ その他・無職

自営官、公安業務従事者、職業スポーツマン、その他①～⑦以外の職種、無職。